戦国時代相良氏の城と領域

二九　相良氏の支配領域図

三〇　相良氏の城郭ネットワーク図

三一　相良氏の軍事組織図

三二　人吉城縄張図

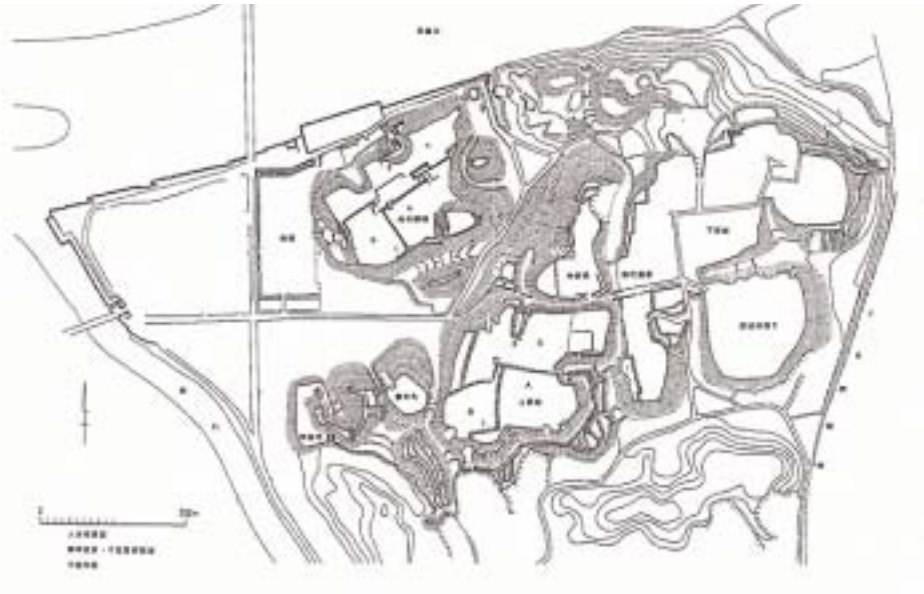
国立歴史民俗博物館　千田嘉博氏作製

人吉城の築城は一般に鎌倉時代初頭とされているが、史料での初見は文明二年（一四七〇）で、長続の代に使用されるようになったとみられる。

この縄張図は近世の人吉城の構造を表したものであるが、原城と呼ばれる本丸の東・南方の裏山に残る空堀や堀切が表わされており、戦国時代の山城の様子も知ることができる。

戦国時代の人吉城は、標高一五〇メートルの台地にある大規模な群郭式の城で、上原・中原・下原・原城外廻・西ノ丸・内城の六郭からなり、中心部の上原城の周りに横堀を回しており主郭となっていた。下原城の南斜面には南九州に珍しい畝状竪堀群を設けているが、全体としてはシラス台地の急斜面を利用した自然地形重視の構造である。

内城は婦女子居住の郭と伝わっているが、その西側麓（現在の相良神社境内）には、義陽の代に「御内」と呼ばれる居館・政庁が造られている。内城の東側と南側で確認されている堀切や埋没横堀は義陽が内城と御内を守るため設けたものと推定される。この御内の機能は江戸時代に引き継がれ、御館と呼ばれる藩主居館・政庁の場となる。



三三　中世人吉城鳥瞰イメージ図

三四　人吉城跡周辺航空写真

三五　中世佐敷城縄張図

佐敷は近隣の大名・国人との会談を行なう外交上の場所や、三郡の老者・年行など重臣の会談場所として利用されている。佐敷城は葦北郡支配の拠点城郭として、享禄三年（一五三〇）頃に築城されたと推定される。

城地は標高一六〇メートルの急峻な山上にあり、頂上周辺を隙間なく曲輪として造成し、外縁の尾根筋に二重・三重の堀切や長大な堀切、畝状竪堀群を設けて防御している。県内でも屈指の構造と規模をもつ山城である。

三七　中世佐敷城跡周辺航空写真

三六　中世佐敷城鳥瞰イメージ図

三八　中世八代城下推定図

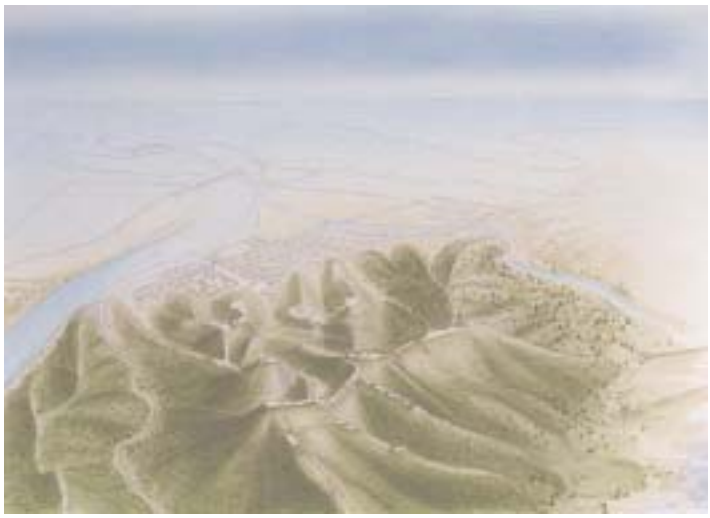
八代は南北朝時代に名和氏の所領となっていたが、交通の要衝であり海外交易の港があったため、相良氏が度々攻撃し、永正元年から天正九年まで相良氏が支配した。

天文二年、十六代義滋が八代本城を築城し、八代の本格的な支配が始まる。本城は古麓の東側山中にあり、新城と呼ばれる曲輪を中心に、谷を取り込んだ七つの曲輪群の集合体となっている大規模な山城である。

山城の麓には相良氏居館と「御内」と呼ばれる政務・儀式の場所があったことが史料から判っている。城下町はこれらを核に水無川を越えた宮地の白木神社までを含む外堀に囲まれた広大な空間に推定されている。城下には八代衆と呼ばれる総勢八百人の家臣団が居住しており、古麓には杭瀬三町と呼ばれる町家があった。このほか宮地にも町家があり、球磨川河口の徳渕にも港町があり海外交易を行なっている。八代には多数の寺院も存在しており、戦国時代には肥後国内最大の都市として繁栄している。

三九　中世八代城縄張図

四〇　中世八代城鳥瞰イメージ図



四一　中世八代城跡周辺航空写真

四二　関城縄張図

永正八年、相良長毎の名和氏との交戦が初見で、天文二年に八代本城とともに改修されている。城地は竜峯山の西側斜面にあり、天文二年以前の城と新城として築かれた城の二城跡が残る。両方とも尾根の付け根を二重の堀切で切断する構造であるが、新城の方が堀切・曲輪の規模が大きく、城道に石積みも見られる。

麓は八代平野が狭まった場所で、軍事上から関が置かれ、八代を防衛していたと考えられる。

四三　高塚（高津賀）城縄張図

天文三年（一五三四）の高塚番役に関する史料が初見で、天文十六年から永禄五年までの間に六度の改修が行なわれている。

高塚は砂川の南岸にある。元々は名和氏・菊池氏の支配地で、相良氏の支配地となって新城を築き、名和氏・阿蘇氏に対する備えとし、重要な境目の城として維持された。

新城と呼ばれている場所は、台地の両端を横堀で切断し城域を確保し、横堀には内外に土塁を併設している。直線的な横堀や切岸、喰い違い虎口、畝状竪堀群、部分的な石積み使用など、永禄四年以降の鉄砲使用に対応した相良氏の新しい築城法を教えてくれる。

四四　鷹峯城（九万城跡）縄張図

大永六年（一五二六）に相良氏が全軍で着陣したのが初見で、天文三年（一五三四）に新城が築城され、八代衆や葦北衆、球磨衆によって交替で城番されている。

古城・新城とも八代と益城の郡境の山中にあり、小川から豊野に抜けるルートの監視・遮断が主目的であったとみられる。

四五　豊福城縄張図

長享元年の相良為続の豊福知行以来、天正九年の島津氏への服属まで、相良氏は五度にわたり豊福を支配している。元は名和氏や菊池氏の城として存在し、天文四年の三度目の支配で三郡人数が在城し地鎮を行なっており、新城として改修を行なっている。

現在、豊福城と伝わる城地は、当時の海岸に近い段丘上にあって、方形の内郭と円形の外郭に幅三〇㍍の大規模な堀が二重に回る構造となっている。こうした縄張は小西行長が築城した宇土城に類似し、内郭には石垣があったという伝承もあり、行長による築城が推定される。

相良氏時代の豊福城は、行長による築城で消失したか、最近、住宅地として削平された東方の「上城」と呼ばれる山中にあったと想定される。